



Title	「最後」と比べた「一番最後」の特徴
Author(s)	保田, 凧澄
Citation	現代日本語研究. 2022, 14, p. 28-43
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92773
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「最後」と比べた「一番最後」の特徴

Characteristics of *Ichiban Saigo* Compared with *Saigo*

保田 凧澄

YASUDA Nazumi

キーワード：余剰的表現，重複表現

要 旨

「一番最後」という表現は，「一番」と「最」において意味の重複が見られるため，余剰的だと見なされることがある。本稿はそのような「一番最後」の余剰的でない側面について検討した。結果，「最後」ではなく「一番最後」が使用される理由として4つの意味上の効果と1つの文体上の効果を見出せた。また，「一番最後」は，「最後」全体と比べると，助詞「に」に後接されやすく，助詞「まで」に後接されにくい傾向を持っていると分かった。以上のことから，「一番最後」は様々な文脈において無秩序に使われているわけではないと言える。

1. はじめに

『三省堂国語辞典』によると，「最後」は「いちばん〈あと／うしろ〉。終わり」という意味である。しかし「一番最後」という表現も広く使われている印象がある。本来は，「最後」という語自体に「一番」の意味が含まれているため，敢えて「一番最後」と修飾する必要はないはずである。このような余剰的表現は重ね言葉や重言と呼ばれることがあり，世間一般的に誤用とされている。それにもかかわらず「一番最後」という表現が使用されるのはなぜだろうか。本稿では，『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）を用いて「最後」と「一番最後」の使用状況を分析し，「一番最後」の余剰的でない側面について検討する。なお，先行研究から引用した用例について，説明の便宜上，一部の語句に下線を加えている。

2. 先行研究

2. 1. 余剰的表現が使われる誘因

そもそも、ある表現を余剰的だと見なすかどうかは、人によって意見が分かれる。例えば須賀(2003)は、「被害を被る」「募金を募る」といった表現は、名詞の部分に既に「損害や危害を被る」「お金を募る」という意味があるため、訂正すべきだとしている。一方で白川(2003)は、「馬から落馬する」「一番最初」などを避けるべき重言だとしつつ、「犯罪を犯す」「被害を被る」などは、複合語であるという意識が今や希薄であるため、重言だとは言えないとしている。このように、余剰的表現に明確な線引きを行うことは難しい。しかし先行研究や身の回りの言説を鑑みて、本稿で取り扱う「一番最後」という表現が、他の並一通りな表現とは違って、誤用か否かという議論を呼び起こすものであることには違いない。以下で、余剰的表現が使われる誘因に関する先行研究を確認する。

斎賀(1975)は、「犯罪をおかす」「古来から」などの、意味が重複している表現に関して、漢語の意義の把握が不消化であることが主な発生原因であると述べている。しかし(1)のように、社会の言語習慣の上から見て容認されているものも存在するとし、余剰的表現に対してある程度寛容な姿勢を見せている。

(1) 西南暖地は台風の常襲地で、農作物はしばしば痛烈なその被害をこうむるが (斎賀 1975 : 47)

斎賀(1975)は、(1)のような表現が一般化した理由について、「害」だけでは「損害(災害・危害)」のような意味的限定が十分にできないからだと推測している。「一番最初」「一番最後」という表現に関しては、「被害をこうむる」以上に既に一般化した表現だと認めている。また、「一番」という副詞が「最初」「最後」を修飾することで意味を更に強調している可能性も示唆している。

国広(2010)は、「二度繰り返す」という表現に関して、「繰り返す」という動詞自体が「同じことを二度する」という意味を持っているため、誤用に見えるが、誤用ではないとしている。その理由として(2)の例を引いている。

(2) 「子供を交通事故で失った両親には、心の平安は二度と戻って来なかった」と言うとき、「二度」は「戻る」ことではなく、「心の平安」が二度持てなかったことを言うのである。 (国広 2010 : 306)

2. 2. 「最も」と「一番」

2. 2. 1. 最高程度を表す用法

「最も」と「一番」はどちらも、三者以上の比較において程度や状態の最高を表しうるが、常に置き換え可能であるわけではない。表1は、「最も」と「一番」の、最高程度を表す用法に関する森田(1980)と飛田・浅田(1994)の記述をまとめたものである。表中の「○」は自然に言えるもの、「×」は非文になるもの、「△」は非文にはならないが使用頻度の低いものを表している。なお、(ア)～(キ)の記号は先行研究からの引用ではなく、筆者が便宜上付けたものである。

表1: 「最も」と「一番」の、最高程度を表す用法
(森田 1980, 飛田・浅田 1994 を基に作成)

比較観点		「最も」	「一番」
文法的機能	(ア) 程度や状態を表す語を修飾する	○	○
	(イ) 述語になる	×	○
	(ウ) 「の」を伴って名詞を修飾する	×	○
指示対象	(エ) 単数	○	○
	(オ) 複数	○	×
使用場面	(カ) 硬い文章	○	△
	(キ) くだけた日常会話	△	○

(ア)の「程度や状態を表す語」は、形容詞・形容動詞・動詞・名詞に渡って分布している。それぞれの用例は(3)～(6)である。

(3) 伊藤投手は現在までで自責点がもっとも少ない。

(飛田・浅田 1994 : 550)

(4) 病人は最も危険な時期を脱した。

(森田 1980 : 489)

(5) 彼女は片側に垂らした三つ編みがいちばん似合う。

(飛田・浅田 1994 : 45)

(6) いちばん南の校舎。

(森田 1980 : 491)

(イ)(ウ)は「一番」のみに見られる用法であり、それぞれの用例は(7)(8)である。

(7) 風をひいたら薬を飲んで寝るのがいちばんだ。(飛田・浅田 1994:45)

(8) 北からこの冬いちばんの寒気団が南下してきた。(同上)

指示対象(エ)(オ)に関して、飛田・浅田(1994)は、「一番」には、一つしかない最高のものを指すというニュアンスがあり、(9)のように最高のものが複数の場合には用いないとしている。他方、「最も」は(10)のように対象が複数でも単数でもよい。森田(1980)も同様の指摘をしている。

(9) *聖家族教会は世界で一番美しい建築物の一つだ。

(飛田・浅田 1994:46)

(10) 聖家族教会は世界で最も美しい建築物の一つだ。(同上)

2. 2. 2. 序列の最初を表す用法

森田(1980)においても飛田・浅田(1994)においても、「一番」は序列の最初を表す用法も有していると指摘されている。用例としては(11)(12)が挙げられる。これは「最も」にはない用法である。

(11) 私は大学まで出席簿の順番がいちばんだった。(飛田・浅田 1994:45)

(12) いちばん星, み〜つけた。(同上)

2. 2. 3. 「最も」と「最後」の関係性

森田(1980)は、「最も」が使われる文脈を、「他の事物との比較の場合」「それ自体の変化の場合」「『変化する状態の中でその先端・極限の状態』を意味する場合」の3つに場合分けしている。それぞれの用例は(13)～(15)である。これらは「最も」に関する考察ではあるが、本調査に対しても有用な示唆を含んでいるため、紹介したい。

(13) 月・火・水の中では火曜が最も忙しい。(森田 1980:489)

(14) 戦後の数年間がこの作家の最も充実した時期であった。(同上)

(15) 最新流行の髪型(= 最も新しく流行している) (森田 1980:490)

中でも、「それ自体の変化の場合」に関して(16),「『変化する状態の中でその先端・極限の状態』を意味する場合」に関して(17)という注目すべき記述がある。以下にそれぞれ引用する。

(16) 連続した流れの中で状態の程度が極大もしくは極小となる場合で、

(点とは限らない。ある範囲をもつ線の場合もある) 比較の対象はそこを除く他の部分すべてを考えている。(森田 1980: 489)

(17) 時が経てば、最も新しいものも「最も」ではなくなる。「最も」には、このようなプラス・マイナス両方向に無限に延びていく直線状態での先端の変動極点を指す場合もあるのである。これが「最初、最後、最終」のような「最も+名詞」的意味の語では、その変動は止まり、限界をもった線分状態の両端部分を指すことになるため、「最も」で表すことがむずかしい。「最初に校長先生の訓辞」を「最も初めに……」とか「最も終わりの……」ということにはかなりの無理がある。(森田 1980: 490)

そして(17)を根拠にして森田(1980)は、「一番最初」や「一番最後」と言うと、「最初」や「最後」が何回もあるようでおかしいと述べている。

3. 問題のありか

表1の(オ)の特徴が、「最後」の「最」にも当てはまるとすると、「最後」の指示対象も複数のものとして認識されている可能性がある。そしてその複数ある「最後」の中から、言及したい一つを浮かび上がらせるために、意識的あるいは無意識的に「一番」で修飾している可能性がある。なお、「一番」には序列の最初を表す用法があると確認したが、「一番最後」という形においては、「最初の『最後』」という意味になることはなく、常に『『最後』の中の『最後』』という意味になる。おそらく斎賀(1975)はこの『『最後』の中の『最後』』という意味から、「一番」によって「最後」の意味が強調されていると述べたのであろう。しかし、複数ある「最後」の中の一つを特定する目的で「一番」を付している場合、それを強調表現あるいは余剰的表現と呼ぶのが適切かどうか、再考の余地がある。このことは、森田(1980)の記述(17)とは相反するが、記述(16)とは似ている。特に「最後」は「最初」と違って「最後の最後」という別の重複表現も持っているため、「最後」が端の点ではなく端の線であると認識されている可能性が高い。

また、国広(2010)の「二度」に関する考察(2)を考慮すると、「一番最後」における「一番」が、直後の「最後」に直接掛からずに別の語に掛かって比較の意味合いを強めている可能性もある。

以上のことから、本稿では、「最後」が複数あるいは線である場合があったり、「一番」が「最後」に直接掛かっていない場合があったりすると考え、「一番」を付す理由を分析し、「一番最後」の余剰的でない側面について考察する。

なお、2.2.3節で確認した3つの場合分けを本稿ではそれぞれ以下の(18)～(20)のように解釈し、「他者比較」「自己比較」「時間比較」と呼ぶこととする。実際には、前後文脈の欠如によって、他者比較・自己比較・時間比較のうちのどれに該当するのか確実には判断しにくい用例もあることに留意されたい。

(18) 「太郎、次郎、三郎の順に挙手した。三郎は三人の中で最後に挙手した」のような、他の人・もの・ことと比べて生まれる「最後」。

(19) 「太郎が最後に挙手したのは小学生のときであり、それ以来、一度も挙手していない」のような、一人の中の経験を比べて生まれる「最後」。

(20) 「太郎は授業の最後に挙手した」のような、絶対的な時間の流れ（を切り取ること）によって生まれる「最後」。

4. 分析

4. 1. 「最後」に「一番」を付す理由

「一番最後」を含む用例を見て、「最後」に「一番」を付す理由を分析した。分析対象は、BCCWJの短単位検索にて以下の条件で検索を行った結果得られた用例162件である。

前方共起（キーから1語）：＜語彙素＞一番

キー：＜語彙素読み＞サイゴ，＜語彙素＞最後，＜書字形出現形＞最後

一つ一つの用例を確認したところ、余剰性を判断しにくいものもあった。それでも全体として見れば、「一番最後」という表現を敢えて使う理由を説明できる用例、すなわち、余剰的でないと言える「一番最後」の用例がいくらかあった。

4. 1. 1. 余剰的でない「一番最後」

「最後」ではなく「一番最後」を使う理由として、4種類の意味上の効果と、1種類の文体上の効果を見出せた。順に説明する。

1種類目は、イディオム「最後にする／なる」と見た目が似てしまう場合に、当該イディオムではないことを示す効果である。他者比較と自己比較が競合し

そんな場合に、他者比較だと示す効果だとも言える。用例としては(21)(22)が挙げられる。(21)(22)中の「一番最後」「いちばん最後」を「最後」に言い換えると、「自宅を訪れるのはこれきりにしなければならない」「現金と帳簿を合わせるのはこれきりになった」という意味に誤解される可能性が増すだろう。

(21) 突然弥生町の増島の自宅を訪ね、不機嫌にあしらわれでもしたら、それ以降の手だてがなくなってしまう、自宅を訪れるのは一番最後にしなければならない。(書籍 1989)

(22) 売店のやり方を自分なりに変えていった結果、現金と帳簿を合わせるのはいちばん最後になりました。(書籍 2003)

2種類目は、ある一定期間の終了時点としての「最後」と、並び続く人・もの・ことの最終番目としての「最後」が重なる場合に、後者の意味、とりわけ最終番目ただ一つという意味合いを明確に示す効果である。言い換えれば、時間比較と他者比較が競合しそうな場合に、他者比較だと示す効果である。ここでは表1の特徴(エ)が活かされていると言える。用例としては(23)が挙げられる。(23)中の「一番最後」を「最後」に言い換えると、「合コンの最後」という意味に誤解される可能性が増すだろう。また、国広(2010)の考察(2)を応用させて、「一番」が「最後」単体ではなく、「最後に来る」という修飾句全体にまで掛かっていると捉えることもできる。その場合、書き手は頭の中で、「最後に来る人」のことを複数人として認識していることになる。

(23) (合コンに) 早く着きすぎると、妙に力が入っているように思われます。でも、遅れて一番最後に来る人よりは好感を持たれます。(書籍 2004)

3種類目は、何かしらの「最後」に既に言及していた場合に、その「最後」の中でも端に近い部分を言い表す効果である。これは、「一番最後」を「最後」の強調形だとする斎賀(1975)の指摘と繋がる。また、森田(1980)の考えを参考にすると、線的だった「最後」を点的な意味にする効果だとも言える。用例としては(24)が挙げられる。(24)中の「一番最後」を「最後」に言い換えると、「ラストシーンの中でもより終わりに近いシーン」という意味が薄れてしまう。

(24) 映画「ザ・ロック」のラストシーンについてです。一番最後のシーンで、メイソンがグッドスピードに渡した紙切れには何がかかれていたのですか？(Yahoo!知恵袋 2005)

4種類目は、何かしらの「最後」に既に言及していた場合に、それよりも更にあと・うしろの部分を追加で言い表す効果である。用例としては(25)が挙げられる。(25)中の「いちばん最後」を「最後」に言い換えても意味は通じるが、直前の文にある「最後」と重なってしまい、不格好あるいは紛らわしく見える。

(25) 血液検査、X線、スキャン、血液の分流、縫合、静脈注射による栄養補給、人工呼吸、そして最後に解剖。ファイルのいちばん最後のページに、保安官のレポートが付いていたが、これがまた省略用語の見本みたいなものだった。(書籍 1989)

5種類目は、「一番最後」の近くに「一番」を用いた他の表現がある場合に、対句を成す効果である。用例としては(26)が挙げられる。(26)中の「一番最後」を「最後」に言い換えると、韻を踏む面白さがなくなってしまう。

(26) 若いデザイナーたちが二十人紹介されているが、一番最後に、一番大きなスペースをさいて、コム・デ・ギャルソンの川久保玲が紹介されている。(書籍 1989)

まとめると、「一番最後」を取えて使う理由として(i)～(iv)の意味上の効果と(v)の文体上の効果を見出せる。

- (i) 「最後にする／なる」というイディオムではないことを示す効果。他者比較と自己比較が競合しそうなときに他者比較だと示す効果とも言える。
- (ii) ある一定期間の終了時点ではなく、並び続く人・もの・ことの最終番目ただ一つであることを示す効果。すなわち、時間比較と他者比較が競合しそうなときに他者比較だと示す効果。
- (iii) 既出の「最後」の中でも端に近い部分であることを示す効果。すなわち、線状だった「最後」を点状にする効果。
- (iv) 既出の「最後」よりも更にあと・うしろの部分であることを示す効果。
- (v) 近くにある、「一番」を用いた他の表現と対句を成す効果。

4. 1. 2. 余剰的である「一番最後」

(i)～(v)の効果に逆行しているものを、余剰的である「一番最後」の用例と見なした。例えば(27)は(ii)に反した用例であり、最終番目ただ一つの意

を表すことの多い「一番」と、漠然とした範囲を表す「方」が共起しているせいで、「一番最後」なのか「最後の方」なのか文意が揺れてしまっている。(28)は(v)に反した用例であり、対句にできそうな「最初」に「いちばん」が付されていないせいで、「最後」に付されている「いちばん」が余剰的に見える。

(27) アクリル絵の具は家庭では落とせないそうですよ。専用の溶剤が必要だそうです。プロに任せるか、場所や大きさによってはアップリケ等でかくすとかしてはいかがでしょう。http://www.hpmix.com/home/show_adry/F82.htm (一番最後の方に書かれています。)(Yahoo!知恵袋 2005)

(28) 遺骨での社葬の場合、式次第の最初に「ご遺骨式場到着」を入れ、告別式のいちばん最後に「ご遺骨お帰り」を加えてもいいでしょう。

(書籍 1995)

4. 1. 3. どちらとも言えない「一番最後」

4. 1. 1 節に挙げたものよりは余剰的に見えるが、(i) ~ (v) の効果に完全に反しているとまでは言えず、「一番最後」という表現を使う理由を説明できないでもない用例は、「Yahoo!知恵袋」「Yahoo!ブログ」「国会会議録」などにおいて多数見つかった。例えば(29)(30)が挙げられる。

(29) アウトルックなどでメールを送信するときに一番最後に署名？宛名を入りたいのですがどうやったら入れることができますか？

(Yahoo!知恵袋 2005)

(30) 一番最後に食べた物なんだっけ？ (Yahoo!ブログ 2008)

(29)(30)において、他者比較の意味合いを強める必要があるわけでもなく、「一番最後」の前文脈に「最後」に相当する語が出現しているわけでもないため、「一番最後」がやや余剰的に感じられる。しかし(29)は(iv)あるいは(ii)の延長にあり、(30)には(16)が関わっている可能性がある。具体的には、(29)の書き手(Yahoo!知恵袋の投稿者)が、署名を入れさえすれば完成となるメールを頭の中で想定していて、そのメールの末尾へ宛名を追加する感覚で「一番最後」と書いているのではないかということである。あるいは、メールを送信するという連続的行為の締めとしての「最後」ではなく、メールの最下行としての「最後」であることを明確に示すために「一番」を付しているのではない

かということである。(30)に関しては、「一番最後に食べた物」は、ただ時間が経っただけでは変わらないが、書き手が食事という行為を重ねれば変わっていく。そのため、(16)で述べられていたような線的な認識が伴われ、「一番」と修飾して一つに特定したくなるのではないだろうか。そうだとすると、国広(2010)の考察(2)にあったように、「一番」が「最後」単体ではなく「最後に食べた」という修飾句全体に掛かっているとも考えられる。

4. 2. 「一番最後」に後接しやすい助詞

4. 1 節の方法ではこれ以上の分析が困難であるため、この節では、「一番最後」の直後に接続しやすい語は何であるかという観点から分析を試みた。その際、「一番最後」の用例だけを見ていては特徴を掴み損ねることが考えられるため、類似した表現との比較を行った。

4. 2. 1. 「最後」との比較

「最後」の直後に接続しやすい語の特徴を調べ、その中でも「一番最後」の直後に接続しやすい語の特徴を調べることにより、「一番最後」が使われやすい文脈を分析した。分析対象は、BCCWJ の短単位検索にて以下の条件で検索を行った結果得られた用例 19,241 件である。

前方共起 (キーから 1 語) : <語彙素>最後

キー : (指定しない)

この 19,241 件を Excel ファイルの形でダウンロードし、Excel の検索機能と目視による確認を用いて、「最後」の直前の語が「一番／1 番／いちばん」になっている用例を抽出したところ、144 件あった。

まず、「最後」を含む用例 19,241 件と、その中の「一番最後」を含む用例 144 件に関して、後接している語の品詞をそれぞれ調べた。結果、「最後」全体でも、「一番最後」限定でも、助詞の後接している用例が最も多かった。具体的には、19,241 件中 18,265 件 (約 95%)、144 件中 136 件 (約 94%) が、そうであった。

そこで、「(一番) 最後」に助詞が後接している用例に分析対象を絞ることにし、どのような助詞か具体的に調べた。結果、頻出している助詞は表 2 の通りになった。表中の「他」には、全件中で占める割合が、「最後」全体でも「一番

最後」限定でも共に 1.00%以下だった助詞をまとめてある。また、10.00%以上の項目には下線を付している。なお、割合には概数を書いているため、足しても 100%にならない場合がある。

表 2 : 「最後」「一番最後」に後接している助詞

		の	に	まで	は	と	他	合計
最後	件数	7,204	6,928	2,055	1,446	103	529	18,265
	割合	<u>39.44</u>	<u>37.93</u>	<u>11.25</u>	7.92	0.56	2.90	100.00
一番 最後	件数	46	81	4	1	3	1	136
	割合	<u>33.82</u>	<u>59.56</u>	2.94	0.74	2.21	0.74	100.00

表 2 から、「最後」全体では、助詞「の」または「に」の後接している用例が、同程度に最も多いことが分かる。次いで多いのは「まで」の後接している用例であり、以上の 3 つが特に頻出の助詞となっている。一方、「一番最後」に限定すると、先述の 3 つの助詞のうち、「の」「まで」の後接している用例は割合を縮小させ、「に」の後接している用例のみが割合を拡大させる。

ここで、「最後」全体では数が多いが、「一番最後」限定では数の少ない、助詞「まで」の後接している用例に着目し、「一番最後」に「まで」が後接しにくい理由を分析した。「一番」の付いていない「最後まで」の用例を一つ一つ確認したところ、一定期間の終了時点として「最後」が使われているもの、すなわち時間比較の意味で「最後」が使われているものが多いように見受けられた。例えば(31)には、火の通り具合を他と比較する意味合いがないため、仮に「一番最後まで」と表すと違和感があり、余剰的に感じられる。

(31) 余熱での火通りを期待して暫く待ちましたが、最後まで固いまま。全く美味しく感じず、友人とがっかりして店を出ました。

(Yahoo!知恵袋 2005)

以上のことから、誤用だと言われがちな「一番最後」であっても、多様な用例中の「最後」に対して無秩序に「一番」が付されるわけではなく、特に「最後に」という形になっている場合に、「一番」が前接しやすい傾向があると分かった。反対に、「最後まで」という形になっている場合には、「一番」が前接し

にくい傾向があると分かった。

4. 2. 2. 「最後の最後」との比較

「最後の最後」の直後に接続している語の特徴も調べ、「一番最後」のそれと比較することにより、正用と見なされている重複表現と、誤用と見なされている重複表現の間でどのような差異が見られるか分析した。なお、「最後の最後」を正用の表現と判断したのは、日本国語大辞典に「最後の最後」という立項があり、『「最後」を強めた語。これよりあとは絶対にない本当の最後、という気持ちでいう』と解説されているからである。分析対象は、4. 2. 1 節にて取り上げた用例 19,241 件のうち、Excel のフィルター機能を用いてキーの直前を「最後の最後」に限定した結果得られた用例 255 件である。

この 255 件に関して、4. 2. 1 節と同様の手順で分析を行った。まず、後接している語の品詞を調べた結果、「一番最後」と同じく、約 94%に相当する 240 件が、助詞の後接している用例であった。

そこで、「最後の最後」に助詞が後接している用例に分析対象を絞ることにし、どのような助詞が具体的に調べた。結果、頻出している助詞は表 3 の通りになった。表中の「他」には、全件中では占める割合が、「最後」全体でも「最後の最後」限定でも共に 1.00%以下だった助詞をまとめてある。下線や数値の表記に関する補足事項は表 2 と同じである。

表 3 : 「最後」「最後の最後」に後接している助詞

		の	に	まで	は	で	他	合計
最後	件数	7,204	6,928	2,055	1,446	156	476	18,265
	割合	<u>39.44</u>	<u>37.93</u>	<u>11.25</u>	7.92	0.85	2.61	100.00
最後の 最後	件数	17	70	106	5	40	2	240
	割合	7.08	<u>29.17</u>	<u>44.17</u>	2.08	<u>16.67</u>	0.83	100.00

表 3 から、「最後の最後」に限定した場合、「最後」全体において頻出であった、「の」「に」「まで」のうち、「の」「に」の後接している用例は割合を縮小させ、「まで」の後接している用例のみが割合を拡大させることが分かる。更に、

「最後」全体では頻出でなかった、「で」の後接している用例がかなり多く見られるようになる。「最後の最後まで」「最後の最後で」の用例を一つ一つ確認したところ、時間比較の意味で「最後」が使われているものが多く見受けられた。また、「最後」全体に比べて「の」が後接しにくいことから、文中における「最後の最後」は主に連用修飾的な役割を担っていると言える。

表2および表3から、正用の重複表現である「最後の最後」と比べると、「一番最後」に後接しやすい助詞の特徴は、「最後」全体の傾向に似通っていることが分かる。

4. 2. 3. 「一番最初」との比較

「最初」「一番最初」の直後に接続している語の特徴も調べ、「最後」「一番最後」のそれと比較することにより、反対語の間でどのような差異が見られるか分析した。「一番最初」を反対語と定めたのは、三省堂国語辞典に「最後」の反対語として「最初」が書かれているからである。分析対象は、BCCWJの短単位検索にて以下の条件で検索を行った結果得られた用例20,230件である。

前方共起（キーから1語）：＜語彙素＞最初

キー：(指定しない)

この20,230件に関して、4. 2. 1節と同様にして、「最初」の直前の語が「一番／1番／いちばん」になっている用例を抽出したところ、306件あった。後接している品詞は、「最初」全体でも、「一番最初」限定でも、助詞であることが最も多かった。具体的には、20,230件中18,760件（約93%）、306件中293件（約96%）が、そうであった。

そこで、助詞が後接している用例に分析対象を絞り、どのような助詞か具体的に調べた。結果、頻出している助詞は表4の通りになった。表中の「他」には、全件中で占める割合が、「最初」全体でも「一番最初」限定でも共に1.00%以下だった助詞をまとめてある。下線や数値の表記に関する補足事項は表2と同じである。

表4から、「最初」全体では、助詞「の」「に」「は」「から」の後接している用例が、この順で多いことが分かる。一方で、「一番最初」に限定すると、先述の4つの助詞のうち、「の」「は」「から」の後接している用例は割合を縮小させ、

表 4 : 「最初」「一番最初」に後接している助詞

		の	に	は	から	他	合計
最初	件数	7,544	5,198	3,200	2,397	421	18,760
	割合	<u>40.21</u>	<u>27.71</u>	<u>17.06</u>	<u>12.78</u>	2.24	100.00
一番最初	件数	69	197	14	5	8	293
	割合	<u>23.55</u>	<u>67.24</u>	4.78	1.71	2.73	100.00

「に」の後接している用例のみが割合を2倍以上に拡大させる。つまり、特に「最初に」という形になっている場合に「一番」が付されやすい傾向があると言える。この傾向は表2の「最後」「一番最後」においても見られたが、「最初」「一番最初」において、より強く見られる。ここから、「一番最後」と比べて「一番最初」は「最初」全体から外れた傾向を持っていると分析できる。

また、「最後」の用例18,265件のうち、「一番」の前接している用例は136件（約0.74%）であったが、「最初」の用例18,760件のうち、「一番」の前接している用例は293件（約1.56%）となっていて、2倍ほどの開きがある。「最初」と「最後」では「最初」の方が「一番」を伴いやすいことが分かる。「一番」には序列の最初を表す用法があるため、その影響で「一番最初」は「一番最後」よりも使われやすいのかもしれない。

5. まとめと今後の課題

「最後」ではなく「一番最後」が使われるとき、全ての用例において余剰性を判断できるわけではないものの、余剰的でないと言える用例がいくらか存在することが確認された。「一番最後」を敢えて使う理由として（i）～（iv）の意味上の効果と（v）の文体上の効果を見出せた。反対に、他者比較の意味合いを強める必要がない場合や、「最後」を点状の意味合いにする必要がない場合に「一番」を付すと、「一番最後」は余剰性を帯びると言える。

（i）「最後にする／なる」というイディオムではないことを示す効果。他者比較と自己比較が競合しそうなときに他者比較だと示す効果とも言える。

（ii）ある一定期間の終了時点ではなく、並び続く人・もの・ことの最終

番目ただ一つであることを示す効果。すなわち、時間比較と他者比較が競合しそうなときに他者比較だと示す効果。

(iii) 既出の「最後」の中でも端に近い部分であることを示す効果。すなわち、線状だった「最後」を点状にする効果。

(iv) 既出の「最後」よりも更にあと・うしろの部分であることを示す効果。

(v) 近くにある、「一番」を用いた他の表現と対句を成す効果。(再掲)
また、「一番最後」は助詞「の」を伴って連体修飾句になったり助詞「に」を伴って連用修飾句になったりすることが多いが、「最後」全体と比べると、助詞「に」に後接されやすい傾向を持っていることが分かった。反対に、「一番最後」は一定期間の終了時点を表しにくいいため、助詞「まで」には後接されにくい。

(i) (ii) も考慮すると、「最後に」という形式において他者比較・自己比較・時間比較の3つの意味が特に競合しやすいのだと推測され、それ故に、「一番」で修飾して他者比較の意味を前面に押し出しているのだと考えられる。確かに、正用の重複表現である「最後の最後」や、反対語である「一番最初」と比べると、「一番最後」という表現には余剰的に見えるところがあるものの、様々な文脈において無秩序に使われているというわけではないのである。

以上が本稿のまとめになるが、「一番最後」という表現が、「最後」との比較選択の結果として出現しているわけではなく、「一番あと」や「一番うしろ」との比較選択の結果として出現している可能性も残っている。また、「最後」という語がまず選択されていて、そこに「一番」が後付けされている、という考え方自体に誤りがある可能性もある。これらの問題に関しては、現時点で分析方法が見つからなかったため、今後の課題としたい。

参考文献

国広哲弥(2010)『新編日本語誤用・慣用小辞典』講談社

見坊豪紀・市川孝・飛田良文・山崎誠・飯間浩明・塩田雄大編(2022)『三省堂国語辞典』第八版, 三省堂

斎賀秀夫(1975)『「一番最初」は重ね言葉か』『言語生活』281, pp. 46-47, 筑摩書房

白川博之(2003)「重言」北原保雄監修『日本語使い方考え方辞典』pp. 250-252,

岩波書店

須賀一好(2003)「コロケーション」北原保雄監修『日本語使い方考え方辞典』
pp. 216-218, 岩波書店

日本国語大辞典第二版編集委員会, 小学館国語辞典編集部編(2001)『日本国語
大辞典』第二版, 第五巻, 小学館

飛田良文・浅田秀子(1994)『現代副詞用法辞典』東京堂出版

森田良行(1980)『基礎日本語 2』角川書店

付記

本稿は, 筆者の大阪大学文学部 2022 年度卒業論文をまとめたものである。

(文学部学生)